創業者偉人伝 第14回

繁栄は和にあり、信用は誠実にある

技術者を愛し、技術者に愛される信頼の「ロブスター」ブランド

伊藤 兼吉（1868～1940年）

■株式会社 ロブテックス

本社所在地：東大阪市四条町12-8　従業員数：179名　資本金：9億6,000万円
創　　業：1888(明治21)年
事 業 内 容：作業工具・ファスニングツール・工業用ファスナー・電設工具・油圧工具・切削工具の製造販売

文明開化に沸く日本のざんぎり頭を整えた“ジャッキ”

伊藤兼吉は1868(明治元)年に生まれ、10代の頃から東京で鉄砲鍛冶として働いていた。当時の情勢について触れておくと、兼吉が生まれる前年の1867(慶応３)年、江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜が大政奉還を奏上し、翌年戊辰戦争が勃発。1975(明治８)年には福澤諭吉が『文明論之概略』を執筆し「文明開化」という言葉が日本中で叫ばれ、制度や習慣に大きな変化がもたらされた時期であった。

そのような習慣の変化の中で、兼吉の人生に大きな影響を与えたのが、明治政府によって出された「断髪令」つまり「ちょんまげの禁止」であった。当時、東京から大阪に移り大阪砲兵工廠に勤務していた兼吉は、修理を依頼されたフランス製馬毛刈器トンデンスをヒントに「これを小型化して人間の頭髪を刈れるようにしたら」という想いから、苦心の末、人間用のジャッキ（両手バリカン）を発明した。「ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする」という言葉が流行ったように、ちょんまげを切り落とした後の髪型の処理に困っていた当時の人々の間で、この商品は大ヒットし生産が間に合わないほどだった。なお、当時は舶来のバリカンも一部輸入されていたが、一般的な理容鋏の数倍の値段が付けられていたため、ほとんどの理髪店では実際に使われることなく箱に入れて飾られていたという。

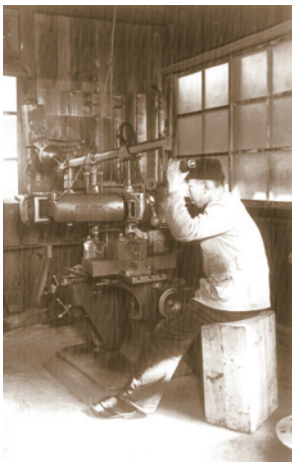
兼吉が開発したジャッキ（両手バリカン）

辛亥革命で輸出が大幅増

1911年(明治44)年、中国で起きた辛亥革命が兼吉の２度目のチャンスとなった。明治政府のもとでちょんまげが禁止されたように、中国の新政府は清時代の辮髪を禁止にしたのだ。結果的に兼吉の作ったジャッキの輸出が激増し、生産は増産に次ぐ増産となった。大阪の問屋の中には、上海に販売会社を作り中国への販売拠点としたところもあり、その特需ぶりがうかがえる。一方で、その頃ジャッキを作る工場も十数社を数えるように増え、他社製品との競合という新たな競争段階へ進んでいく予兆が見え始めていた。

ジャッキ時代の終焉と「日本理器 株式会社」の誕生

ジャッキの好調により右肩上がりで業績を伸ばしていた兼吉であったが、ヨーロッパで使われていたバリカンが輸入されるようになり事態は急転する。日本人の握力に合うように改良されたバリカンが流通したことにより、ジャッキの役目が終わろうとしていたからだ。そして、1915(大正４)年、東大阪に大軌電車（現・近畿日本鉄道）が開通したのをきっかけに、一帯の工場で電気が動力として使



昭和二十年頃の日本理器㈱社屋（写真左）
後の工具製作に使用した彫刻機（写真右）

われだすと、機械化による生産の増加が顕著となり各工場間の競争がさらに激しくなっていった。

1921（大正10）年頃、東京でバリカン工場が合併して大量生産体制が作られた。大阪の他社でも同様の動きがあることを察知した兼吉は、競争に耐えうる強固な組織を作るべく、大阪で同じくジャッキ生産をしていた「地引鉄工所」と対等合併し、1923（大正12）年８月12日「日本理器 株式会社」を創立した。これにより、現在のロブテックス本社の地に100坪程度の新工場を建設し、資本金10万円、従業員70名の理髪用バリカン工場が誕生した。

創立直後の日本理器㈱は激しい価格競争に晒され、なかなか軌道に乗れずにいた。契機となったのは1923（大正12）年に発生した関東大震災であった。関東のバリカン工場が全滅し注文が大阪に殺到、日本理器㈱も例外なく注文に追われることになった。これまでにない大量の注文をこなすため、全機械を自動操作へ変更したほか、バリカン製造に必要なメッキ処理を自社工程で完結させるための設備を導入するなど、同社の生産工程と設備は急速に近代化・合理化が図られることとなり、日本理器㈱はバリカンの全国生産量の50％を占める国内のトップメーカーに上り詰めた。

総合工具メーカーへの脱皮「エビ印」に託された想い

経営が安定してきたことに胡坐をかかず、経営の柱となる製品をもう１つ作らねばと考えていた兼吉は、1927（昭和２）年社内に「工具部」を設立し鍛造作業工具の製造に着手した。それから２年後、兼吉率いる日本理器㈱は「エビ印」の付いたモンキレンチを発売し、理髪器具メーカーから総合工具メーカーへの第１歩を踏み出した。この「エビ印」には「腰が曲がるまで使える丈夫な製品」という意味が込められており、実際に四国のある企業では発売からおよそ30年間の長きにわたって、１本のエビ印モンキレンチが現役で使用され続けてきたという。兼吉が目を付け作り上げた「エビ印」ブランドの工具は現在まで長きにわたって、多くの技術者の相棒として活躍していくこととなった。

日本の復興を真っ先に支えた工具

その後、日本理器㈱は他の企業と同じく戦争の波に飲まれていくこととなる。昭和18（1943）年、社名を「帝国精鍛工業株式会社」と改め、海軍の管理工場として各海軍工廠に機関銃部品や魚雷部品の鍛造加工品を製造した。バリカンや作業工具の生産は10分の１以下となり、完全な軍需工場として1945（昭和20）年の終戦までこの体制は続いた。

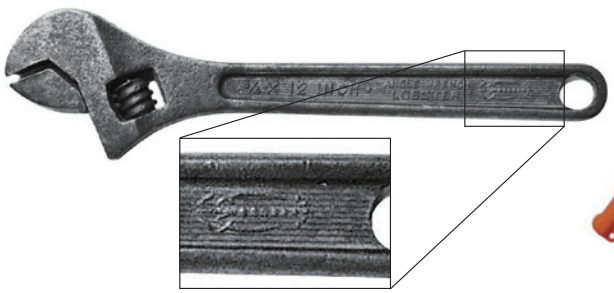
戦後の日本は混迷を極めたが、そのような状況でこそ必要とされたのは、あらゆるものづくりに必要な「工具」であった。終戦から２か月後、社名を「日本理器㈱」へ戻しモンキレンチとバリカンの生産を再開させると、各地から問い合わせが殺到し飛ぶように売れていったという。

世界の技術者を支えるロブスター

創業100年を迎えた1988（昭和63）年、これからの100年を見据え、事業の見直しや進むべき方向などを社内で検討する中、社名と商品のイメージを一致させるため社名を「ロブテックス」に改名し、平成４（1992）年から使用を始めた。それまで商品等に使用していた商標「ロブスター」と、「ＴＥＸ＝テクノロジー＋Ｘ（＝無限の意）」から成る複合語であり、色々な分野に進出できるようにとの願いが込められている。

創業128年、創立93年を迎える今日、作業工具のほか工業用ファスナー、ファスナー締結工具などが加わり、その中でも今年で生産55周年を迎えた圧着工具は、現在スタンダードとなっている「ラチェット内蔵機構」を業界初採用するなど、圧着工具のパイオニアメーカーとして常に使い易さを追求してきた。同社のつくる“確かな工具”は、今日も世界中の技術者の手足となって“確かな仕事”を支え続けている。

LOBSTER®
株式会社 ロブテックス



1929（昭和４）年に発売された国産第１号のモンキレンチ。
現在につながる「エビ印」が刻印されている。

今年生産55周年を迎えた圧着工具（写真左２つ）。
同社の製品は性能のみならずデザイン面でも高く評価されている。